ラオスのこども通信

89号
2025年1月発行

発行：(認定)特定非営利活動法人 **ラオスのこども**

- ついに、ラオス語版『ぐりとぐら』を出版します！ ▶P.1
- はじめる・つながる・つくりだす ▶P.2
- 「ラオスのこども」の仲間たち ▶P.4
- メコンのほとり「通」 ▶P.4

＊写真の説明はp4をご覧ください。

ついに、ラオス語版『ぐりとぐら』を出版します！

おなじみの人気絵本『ぐりとぐら』。これまで、1冊ずつラオス語訳のシートを貼って学校図書室に届けてきました。
そして今、ラオス語版の出版に向けてスタートしました。

図書活動をつみかさねて

「絵本の楽しさをラオスの子どもたちにも」「本を通して世界を広げてほしい」。そんな思いから幼稚園のバザーで絵本の寄付を募ってラオスに送る「絵本一冊運動」が「ラオスのこども」の活動の始まりでした。ベトナム戦争終結後、インドシナ難民が多く出るなど混乱が続いていた1982年のことです。学校では教科書もそろわず、町には書店も図書館もなく、子どもたちは絵本はもちろん文字にふれる機会がとても少ない状況にありました。また、ラオスには多くの民族が暮らし、それぞれの言語を持っていますが、学校教育はラオス語のみで行われることも、少数民族の子どもにとって文字を覚える上でのハードルとなります。

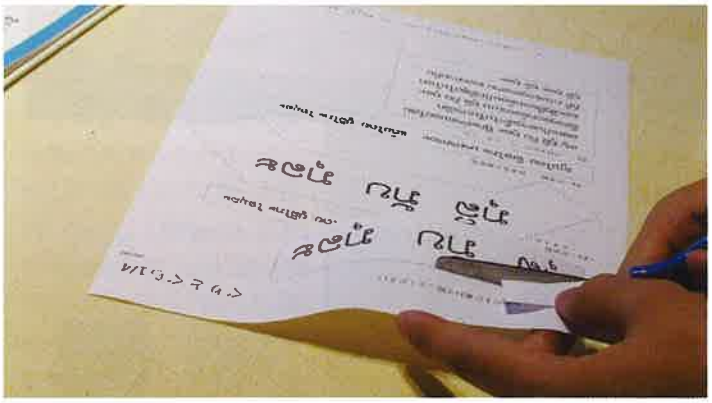
ラオス語が母語でない子もだれもが文字に親しめるよう、当会では日本の絵本を少しずつラオス語に翻訳。そのラオス語訳シートを絵本に貼って送る「ラオス語絵本プロジェクト」を日本のみなさんに呼びかけ、絵本が小学校に並び、子どもたちとの出会いを果たしました。さらに、先生による読み聞かせも行われるようになったことは大きな一歩でした。出版社、作者の理解をいただき、全国のみなさんの協力があって長く続けられています。

みんなで楽しむ、一人ひとりの想いが広がる

『ぐりとぐら』(なかがわ　りえこ:作　おおむら　ゆりこ:絵　福音館書店刊)も、この活動でラオスの子どもたちに親しまれてきた一冊です。翻訳シートを貼った「ກຸລິ ກັບ ກຸລະ(ぐりとぐら)」は、およそ四半世紀にわたって全国各地の小学校に届けられてきました。

のねずみのぐりとぐらは、「このよで　いちばん　すきなのは　おりょうりすること　たべること」。森のおくへ出かけて行き、とっても大きな卵を見つけ、カステラを焼いていると、匂いにつられて、いつのまにか森じゅうの動物が集まって、みんなで食べます。

ラオスの子どもたちの感想は、「森の動物たちとカステラを分け合うところが楽しそうで大好き」という女の子、家に帰るところの絵で「卵の殻を乗り物にしているのがいい」という男の子。さらには、「大きな卵をどうやって運んで料理しようか、アイデアを出し合ってできあがっていくのがおもしろくて、自分もやってみたくなった」と、子どものころに何度も読んだことを振り返る大学生もいます。



自宅にある読まなくなった絵本に、当会が用意した翻訳シートを貼ってラオスの小学校へ

ラオスでは大人数の家族がそろう食卓をはじめ、みんなでご馳走をつくって、分け合って美味しく食べる光景がよく見られます。そうした場面が楽しく描かれているところが子どもたちになじむのでしょうか。ラオスで人気の絵本のキーワードの一つが、「みんなで」なのかもしれません。

大きな卵で何をつくろうか、ぐりが「めだまやき」を思いつき、ぐらは「たまごやき」と言い、「それよりも、かすてら」と決まります。この3つ、ラオスではどのようにいうのでしょう。

めだまやきは「カイ(卵)ダオ(星)」。目玉でも月見でもなく「星焼き」となるようです。たまごやきは「カイチューン(揚げ)」。そして、かすてらは「カノム(菓子)カイ」で卵菓子。

「カノムカイ、どんな味かなあ」と、食べたことがないお菓子に思いをふくらませる子もいました。

名作絵本の出版に向けて

当会はこれまで数々の絵本を出版してきました。群を抜いて人気なのはラオスのだれもが知っている昔話『カンパーとピーノイ』。(p3参照ください)。自分たちが見聞きしたり近しく感じられるものが長く読まれてきました。そうしたラオス由来の本にとどまることなく、いろいろな本が好きになってほしいという思いをこめて、『ぐりとぐら』の出版に取り組んでいます。

翻訳シートで親しまれてきた絵本では、『おおきなかぶ』(内田莉莎子:再話　佐藤忠良:絵　福音館書店刊)のラオス語版を2020年に出版することができました(p4参照ください)。おじいさん、おばあさん、孫娘、そして犬、猫、ねずみでかぶを抜きます。ラオスの小学校では「ヌーン、ソーン、サーン(イチ、ニ、サン)」という掛け声とともにかぶを引っぱる寸劇が人気です。「みんなで」がカギとなったのでしょうか。子どもと本をつなぐキーパーソンの先生の心もつかみました。

自分の身の回りから一歩出て、知らなかった世界に扉が開かれていく。図書活動の大きな目標の一つです。当初は活動が盛んでなかった学校も、多様な本の補充を重ねる中で熱心な先生が増え、「この本が好き」「読み聞かせをしたい」という子どもたちが現れています。『ぐりとぐら』ラオス語版は図書活動をさらに進めてくれることでしょう。

出版が決まった矢先、中川李枝子さんの訃報が届きました。ラオス語版ができるのを楽しみにされていたとご家族からお聞きしました。ご冥福をお祈りいたします。　(森 透／理事)

『ぐりとぐら』特別募金 ご協力のお願い

『ぐりとぐら』ラオス語版を3,000部出版するための費用(約100万円)を募っています。ラオスの子どもたちに多様で豊かな本を届け、絵本を通じて、たくさんのラオスの子どもたちが読書の楽しみを経験できるよう、ぜひご協力ください!書き損じハガキや未使用切手でのご寄付も受け付けています。

詳しくはコチラ ▼

はじめる・つながる・つくりだす [2024.8-2024.12]

新たに32人の奨学生が決定

近年ラオスでは中等学校(日本の中学校、高等学校に相当)の中途退学者が増えています。経済状況の厳しさがその要因の一つと考えられることから、2024年度から奨学金事業の枠を拡大しました。対象となる中等学校はこれまでの3校から11校に増やし、物価高騰の状況を鑑み、奨学金の給付額も増額を決定しました。対象11校で10月～11月にかけて当会スタッフと県郡教育スポーツ局職員、校長、村教育開発委員会の委員が合同で書類審査と面接審査をおこない、32人の奨学生が決定しました。

奨学生に決った生徒たち

決定したばかりの奨学生たちにインタビューをおこないました。まだ奨学生に選ばれたことを知らされていない生徒に、「あなたが奨学生に決まったのよ」と伝えると、緊張していた顔がほころび、一気に笑顔になりました。なかには「本当に僕が選ばれたんですか?」などと確認する生徒もいて、この奨学金が彼らにとってどれだけ大事かを感じます。

母を3年前に亡くし、父親と2人で助け合いながら農場横の小屋で暮らしている生徒、父は不在で母には障害があり、現金収入は離れて暮らす姉からの仕送りと自分のアルバイト代が頼りという生徒、自身が障害を持ちながら学校の寮で一人暮らしをして卒業を目指しているなど、どの生徒も厳しい状況が伺えます。

奨学金を何につかうかを尋ねると、「制服」と即答する生徒もいました。成長した身体に合う制服を複数揃えることができず、1着だけの制服のシャツを、毎日家に帰っては洗って干して、翌日に着ていくという生活をしているとのことです。また「体育の授業で使うシューズ」と答えた生徒も。昨年まで使っていたものは小さくなって履けなくなってしまい、今年はシューズがなくて、体育の授業に参加ができていないとのこと(学校からの支給はされず、生徒同士で貸し借りすることはあるそうです)。

奨学金が、厳しい状況の助けとなり、中等学校の卒業を後押ししてくれることを願うばかりです。　(赤井朱子／スタッフ)

奨学生を支えてください

この奨学金事業は「マンスリーサポーター」のご支援によって実施しています。マンスリーサポーターは、毎月1,000円以上で指定いただいた定額の寄付をいただくものです。奨学金事業を支えるマンスリーサポーターとしての支援も、ぜひご検討いただけると幸いです。

詳しくはコチラ ▼

中等学校4校が集い、図書室交流大会!

ヴィエンチャン県サナカム郡とムーン郡で、8月に各郡内の中等学校4校の学校図書室担当教員や各校の村教育開発委員会、県・郡教育局が集まり、それぞれ2日間にわたり「学校図書室交流大会」を実施しました。学校ごとに、図書室サイン(案内表示)や図書室の展示、図書を活用した授業計画を披露し合いました。自分たちの図書室の活動成果を他校に向けて発表するとあって、先生たちも力が入っていました。

図書室サインの発表で、他校の好事例をスマホで撮影している先生や、民族の展示で、「パネルに貼った民族の写真の下に対応する民族の本を置いた方が分かりやすいと思う」とか、理科の血液に関する展示で、「血液型の本も紹介したら生徒がもっと関心を持つかも」という意見やアドバイスが出るなど、賑やかな交流の場になりました。(JICA草の根技術協力事業「中等学校における学校図書室の役割拡充を通した教育改善事業」)

図書室展示の発表に、質問やコメントする先生たち

大人気の昔話、再版10版を超える

ラオスで皆が知っているお馴染みの昔話といえば、『カンパーとピーノイ』(ドアンドゥアン・ブンヤヴォン:作　ヴォンサヴァン・ダムロンスック:絵)。孤児(カンパー)が小さなお化け(ピーノイ)を助け友だちになったことで、いろいろな福が舞い込む物語は、どの学校図書室でも貸し出しナンバーNo.1です。

『カンパーとピーノイ』(左)と『カンパーとナンガー』。各3,000部を再版

続編の『カンパーとナンガー』で、お嫁さんのナンガーを奪おうとする王様とのハラハラドキドキの攻防は、中等学校の文学の教科書にも掲載されています。

大人気のこのお話、当会が1990年に出版し、以来再版を重ね、直近の2021年版も品切れとなり、この度『カンパーとピーノイ』は11版、『カンパーとナンガー』は10版目の再版となりました。

今回の再版を機に、教育スポーツ省の認定を受けるため、細かなラオス語表記の修正を行いました。NGOの教育活動やイベントブースでも売れ行き好調です。(NPO法人地球の木、キヤノン株式会社、書き損じはがきキャンペーンご支援)

通常総会を開催

9月21日、東京都大田区「ライフコミュニティ西馬込」にて、2024年度通常総会を開催しました。活動会員33人(オンライン参加者4人、書面表決者13人、委任状3人を含む)が参加し、2023年度第22期の事業報告案および決算報告案が承認され、2024度第23期の事業計画書、予算が報告されました。

第2部の企画では、保育士の西村恵子さんによる「翻訳絵本リスト」に加わった絵本の読み聞かせがおこなわれ、図書館活動アドバイザーの下田尊久さんからは「現代の図書館の役割からみた図書館活動の意義」と題した話をしていただきました。その後、絵本や図書館に関する意見交換が活発におこなわれました。

*事業報告、決算報告は「ラオスのこども」ホームページへ。

グローバルフェスタJAPANに5年ぶりに参加

グローバルフェスタは、国際協力、社会貢献、SDGsなどに取り組む様々な団体が一堂に会する国内最大級の国際協力イベントです。9月28～29日、新宿住友ビル三角広場にブースを設けて、これまでに出版した絵本の展示と活動紹介、ラオスの織物や刺繍小物の販売をおこないました。

国際協力分野でのインターンに関心のある大学生や、SDGsやボランティア活動を学ぶ中高生、世界各地でNGO活動を続けている仲間たちなど、たくさんの方がブースを訪問してくださいました。

ラオスの手仕事 in 京都&東京

10月3日～7日、秋の京都「桜谷町47」で、ラオスで織られた布や服、刺しゅう小物などの手工芸品を展示販売しました。例年春に実施しているイベントを今年は秋に開催。代表のチャンタソンが会場でラオス織物の世界について話し、大盛況でした。

12月14日～29日には、東京・谷中(やなか)の「the ETHNORTH GALLERY」で、同じくラオスの織物や刺繍商品の展示販売をおこないました。ラオスで最も手の込んだ織物「タームック織り」や、全面の縫い取り織りが壮観なタイデン族の織物、レンテン族やモン族の個性溢れる刺繍など、たくさんの来場者に楽しんでいただきました。

東京・谷中(やなか)にて

「ラオスのこども」の仲間たち

ラオス語版『おおきなかぶ』の出版

高野直子さん（編集者・海外出版コーディネーター）

ラオス事務所で打ち合わせ

私が最初にラオスを訪れたのは2018年11月。理事の新藤雅章さんにお声がけいただいて、日本の絵本についてお話しさせていただいた時でした。

滞在時に印象的だったのが、日本の絵本をラオスの子どもたちがとても熱心に読んでいる姿でした。中でも大人気と伺ったのは『おおきなかぶ』。長い列を作って「うんとこしょ　どっこいしょ」とかぶを引っ張る様子も拝見しました。でもその時の本は日本語テキストの上にラオス語の翻訳シートを貼ったもの。それをめくりながら絵本を読む子どもたちにも出会いました。下に隠れてしまっている絵を見たいから、と話していました。

私は日本の絵本を海外で出版する仕事をしているので、ラオス語版を作りたいと思うようになりました。事務局にご提案したところ「募金を集めて作りましょう」と言ってくださり、日本の発行元と交渉、著者の方々にも許諾をとって、ラオス語の翻訳権を取得。現地のスタッフの方をはじめ多くの方のご尽力で1年以上かけてラオス語版『おおきなかぶ』が完成しました。費用はかかりますが、ラオスの子どもたちが母国で絵本を読むことができる機会が少しずつでも増えることを願っています。今は『ぐりとぐら』のラオス語版の出版準備をしており、こちらもとても楽しみです。

私は、IBBY（国際児童図書評議会）という「子どもの本を通じて国際理解を」という理念のもとに作られた組織の日本支部で理事をしておりますが、「ラオスのこども」は2008年にIBBY朝日国際児童図書普及賞を受賞しています。選考の際には「本を作るだけで終わらず、丁寧に配付し届け、試行錯誤しながら子どもたちが本を親しめるように、多方面に働きかけを続けてきた点」が高い評価を得たと聞いています。

この素晴らしい活動がさらに広がり、ラオスの子どもたちが少しでもたくさんの本に触れる機会が持てますよう願いつつ、私も微力ながら活動を続けていければと思っています。

表紙の写真

みんなが見ている、聞いているのはどんなお話かな。子どもたちはもちろん、読み手の気持ちだってわくわくさせる。そんな力が読み聞かせにはあります。先生にとって図書活動は、他に仕事があって忙しい、面倒という思いになることもあります。でも、読み聞かせの楽しさを知って先生が本好きになると、子どもたちも本への興味が高まります。2023年、ポーンホン小学校（ヴィエンチャン県）にて。

特定非営利活動法人ラオスのこども

組織の理念「ラオスのこども」は、公正で平和な社会づくりに 貢献することを目的として、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択できるよう、日本とラオスの人々が協働しながら、読書に親しむ環境をつくります。

ラオスのこども通信 89号

2025年1月発行　代表：チャンタソン・インタヴォン　編集人：森透
発行：Action with Lao Children / Deknoylao
（認定）特定非営利活動法人 ラオスのこども
〒143-0025東京都大田区南馬込6-29-12ミキハイツ303
TEL/FAX 03-3755-1603　e-mail: alctk@deknoylao.net
https://deknoylao.net
都営地下鉄浅草線西馬込南口下車徒歩7分
郵便振替00140-6-462494

メコンのほとり通

通学は電動バイクで

最近、ラオスの中等学校生徒の通学の足となっている「ロッティープ　ファイファー」。直訳すると「電気自転車」。でも、よく見ると、日本の電動自転車のようなペダルはなく、「電動のバイク」です。

近年ガソリン代が高騰し、特にコロナ禍直後にはガソリン自体が不足して、ガソリンスタンドに行列ができていました。ここで、急速に普及したのが電動バイク。ガソリン代に比べ安い電気で動くバイクは、生徒の通学の足となりました。ラオスは内陸国でガソリン代は高くつきますが、水力発電が豊富で、電気は比較的安定して確保できます。

バイクの価格は、ガソリン駆動が3,600万キープ程度（約26万円）、電動は300万～1,500万キープ（約22,000～108,000円）。ガソリン駆動に比べ、ぐっと手ごろです。安いものはバッテリーがすぐにダメになってしまうという難点はあるようですが、通学の足にはこれで十分かもしれません。

かつては自転車が並んでいた駐輪場は、その後、ガソリン駆動のバイク（写真下、ボリカムサイ県、2019年）に変わり、今や電動バイクが主役（写真中、ヴィエンチャン県、2024年）。